発表 No.実5　　**実践発表**

豊橋市の初期支援コース「みらい」が果たす役割について
―開設 6 年目の成果と課題―

築樋博子　（　豊橋市教育委員会　）

１．初期支援コース開設の経緯

豊橋市は愛知県東部の中核市で、人口は約 37 万人、外国人登録者数は約 2 万人、これは市民全体の約 5.6%に当たり外国人住民の集住地域として知られている。これまで教育委員会では、日本語指導が必要な児童生徒数に応じて加配教員を配置し、日本語適応教室を設置してきた。それに加えて、市採用の教育相談員等の支援者を学校に派遣し、外国人児童生徒教育を居住地の学校から切り離さない支援体制の整備を進めてきた。しかし豊橋市内には派遣会社が多く、海外から日本に働きに来る人々の「玄関」になっており、日本語がわからない外国人児童生徒の転編入が続き、平成 29 年度には市内の中学校 22 校中 21 校に外国人生徒が在籍することになった。

こうした中、特に中学生への初期の日本語指導は、言語教育としての日本語に関する専門的な知識が求められる一面があり、各学校の担当教員が苦慮するところだった。年度途中の直接編入生も多く、苦心して指導時間を捻出しても、週に数時間しか日本語指導ができない学校もあり、学校による指導の格差が顕著だった。教育委員会では編入直後の学校生活への適応支援として、登録制の有償バイリンガルボランティアを派遣していたが、平成 29 年度には予算に対して派遣数が超過し、年度末には必要な生徒への支援が難しくなった。そうしたことから、日本語がわからなくても多くの時間在籍学級で自主学習をせざるを得ない生徒や不適応で不登校になる生徒、希望しながらも日本での進学を諦める生徒等、喫緊の課題への対応が不可避の状況になった。

こうした状況の中、日本語初期段階の生徒に公平な指導時数と指導の質を保障するため、平成 30 年度に市の東部の外国人集住地域の中学校内に、通級型の初期支援コース「みらい東」を開設し、中学生に特化した初期指導を開始した。平成 31 年（令和元年）度には交通の利便性を考慮し、豊橋駅に近い中学校内にも同様に「みらい西」を開設した。初期支援コースの指導は、外国人生徒や保護者、学校関係者から高い評価を受け、令和 2 年度には小学生を対象とした「きぼう」を集住地域内の小学校内に開設した。令和 5 度からは「みらい西」に小学生の受入れを始め、市内全域の児童生徒を支援する体制を整えた。平成 30 年度の開設から令和 5 年度の 12 月末までに初期支援コースに通級した児童生徒は、小学生が 131 人、中学生が 240 人である。

２．初期支援コースでの指導の整備

初期支援コースでの指導は、在籍校の管理下において在籍学級の教育課程の一部に替え実施する「特別の教育課程」として行っている。対象の児童生徒は、月曜日から木曜日まで初期支援コースに通級し、金曜日には在籍校に登校する。指導期間・指導時数は、小学校コースが 8 週間 160 時間、中学生コースが 10 週間 200 時間である。中学生は編入後進路選択までの時間が少ないことを考慮し、可能な限りの時間数が確保できるようにした。

初期支援コース「みらい」では、開設当初から対象生徒の学習状況を把握しながら、『外国人児童生徒受入れの手引』（文部科学省）の日本語プログラムを参考に、コース設計を行った。令

和４年度には、オリジナルテキスト「みらいの日本語」を作成し、無償配布とした。更に「みらいの日本語」に対応する「練習帳」や「授業用 PowerPoint」等の副教材を作成し、初期支援コースで活用すると共に、在籍校にも配布を行った。以下、プログラムの概要を挙げる。（図１）

<table>
<tr><th colspan="3">（図１）　みらいのプログラム</th><th>～２週</th><th>～４週</th><th>～６週</th><th>～８週</th><th>～１０週</th></tr>
<tr><td colspan="3">サバイバル日本語（みらいの日本語）</td><td>Stage１</td><td colspan="4">この後は、生活の中で頻出語彙や表現をその都度取り上げて指導</td></tr>
<tr><td rowspan="3">日本語
基礎</td><td colspan="2">みらいの日本語（文型）</td><td></td><td colspan="2">Stage2－1　名詞文</td><td colspan="2">Stage2－2　動詞文・形容詞文</td></tr>
<tr><td colspan="2">学習方略</td><td></td><td colspan="2">提出物・授業の受け方</td><td colspan="2">辞書引き・授業の振り返りの書き方</td></tr>
<tr><td colspan="2">文字・語彙</td><td>ひらがな・語彙</td><td>カタカナ・語彙</td><td colspan="2">漢字</td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="3">技能別
日本語</td><td colspan="2">読む</td><td colspan="2"></td><td colspan="3">日本語多読ライブラリ等の読み</td></tr>
<tr><td rowspan="2">書く</td><td>日記</td><td colspan="3">母語日記</td><td colspan="2">日本語日記</td></tr>
<tr><td>マイヒストリー</td><td colspan="3">母語作文</td><td colspan="2">日本語作文・日本語スピーチ</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="2">日本語と教科の
統合学習</td><td>JSL 数学</td><td colspan="5">小学校段階の基礎計算・数学の内容と日本語を同時に学ぶＪＳＬ数学指導</td></tr>
<tr><td>JSL 英語</td><td colspan="5">日本の英語学習のスタイル・英語と日本語の文型や表現を学ぶＪＳＬ英語指導</td></tr>
<tr><td colspan="3">中学校生活適応
（在籍校登校時の課題）</td><td colspan="5">給食・教室の席・時間割・教科の先生・国際の先生にインタビュー
日本人の名前・図書室の本を借りる・部活動・教科の準備・在籍校の学習</td></tr>
<tr><td colspan="3">総合学習・キャリア</td><td colspan="5">〔ガイダンス的活動と総合学習的活動〕
進路ガイダンス・部活動・学校行事・情報モラル・校外学習・調理実習　等々</td></tr>
</table>

３．在籍校との協働

開設前に危惧されたことは、在籍校が通級生徒の指導から気持ちが離れてしまい、初期支援コースにお任せになってしまうことであった。生徒が在籍校にソフトランディングするために、在籍校との情報共有の方法を検討し、次のような支援を行った。（図２）

毎日	出欠連絡を在籍校にメール送信すると共に、日々の様子を簡潔に報告。
毎週木曜日	月～木曜日の指導報告書を在籍校に送付し、在籍校担当者と共有する。
毎週金曜日	在籍校登校時に初期支援コースの教員やスタッフが在籍校を訪問し、生徒に直接支援を行ったり、国際担当者や学級担任と直接情報共有を行ったりする。その際、教科の副教材の購入や、テストや行事の参加等についても話し合う。
修了時	「個別の指導計画」の引継ぎ。修了時の生徒のレベルに合った教材の提供や紹介。

こうした取り組みにより、学級担任が指導報告書の内容（生徒が頑張っていること等）を紹介して、学級での受け入れ準備をする様子が見られた。初期支援コースの担当教員と国際担当者が密に情報交換をすることで、経験の少ない在籍校の国際担当者の不安が軽減できたと感じている。

通級児童生徒の中には、母国で発達に関する診断を受けてきた者、不安定な精神状況で服薬をしている者、家庭内で DV がある者等、生徒指導上の重い課題を抱える者もいた。初期支援コースでは、母語話者のバイリンガル相談員が毎日関わることができるため、詳細な情報を得ることができ、在籍校と共有し修了後の指導計画を立てたり、学校外の専門機関を紹介したりした。

４．旗艦校としての広報・情報提供

初期支援コースはその実践を広く伝えることで、外国人児童生徒教育についての啓発活動の一翼を担うことができると考えた。そのため開設以降毎年、教育委員会主催の外国人児童生徒教育担当者研修会で実践報告を行ってきた。また令和３年度より「初期支援コース通信」を作成し、市内全校に配布することで、外国人児童生徒を担任していない教員にも情報提供を行っている。

５．まとめ

開設後６年が経ち、市内の学校では既に初期支援コースへの強い信頼ができていると感じている。しかしその信頼は「初期支援コースに任せれば大丈夫」と在籍校が支援の在り方を考えなくなっている一面もある。今回取り上げた「初期支援コースでの指導の整備」「在籍校との協働」「旗艦校としての広報・情報提供」は今後も検討し続ける必要があると考えている。